



南總里見八犬傳第二輯卷之二

東都 曲亭主人編次

第十三回 尺素を遺く因果もづろ松
雲霧と拂て妖孽をめで休

伏姫ハあひうけく奇しき童小鏡綸さとしを明の眠るたのぐさ愛
とぞおの跡と免ぬ人の言ふのあやれなる月疑ひはれなるあはれ涙乃
あふ敷妙の袖ハおの腸を絞るむろふ哽入り。歎き沈せむひろ。あふ
あはれ心操人のむくは立ちたる日來雄くは姫うるはふら
駿ぐ月とわが影を頼みかゝる黒髪と搔あぐく目を拭ひうて
ある前世は造り罪ハ秤成おのさ輕さへあつねども遂はこの才小報ひ
来る。かくやぐおのあはれなる人のうろこのあう松さよ。悲莫親のうへ



かた崇を負ふれと使ひ。後のその後の世より。捺落の底に沈むと。
悔いと云へうもあらず。只はづかく悲しんハ親の爲又人の爲は蓬き
心ゆくくみ付々種る畜生のその氣を受くる八の子ど力小宿一スルバ
つふせん。そもこの山み入り一日より。鶴の林の老けをこそ就鳥の嶺の
るを仰ぐ一念不退流經の外ハよう他事あるさめり。佛もてみ
救ひ多うぞ神え助けめらぶと有刃とる。実あるや。や臥房を
共みせんとともそとのい解人澄握へる。こが人のそく親乃恥九の
世を撫るとも。竟小雪の時。あゝで只畜生の妻といふ生ての恥辱す
死してのうらな。喻は物あるべや。ちと鬼の毛乃末はわく露むり王
ふまをさむしく。曩小瀧田よりじられ犬を殺しとありともみぬ死
さう丁と悔いけし死へん折ハあらざるが。死かふしも業因歟されば

善巧方便ぞく。鏡あけせむる。佛の書ゆも有る。因果といふもあり。
 ちよ。よりやこの子のまゝくある親同胞ふ幸あるまゝ。家の榮をよせむとく。
 ちよ。あふる恥ややうえん悲したる。と声立ち。傷の人ふりのいふとく。ぢひ
 凝ていたるく。小賢くたふも乱る。あふは繁薄尾花ぐ下ゆ婦
 ちよ。あふ秋の日影のさまげる。音同ハ暑の名残とて。岸ふ水浴ふ山鴨頂近く
 鳴く。とく。伏姫估と仰を瞻つ現。く外ふ入るたふ。寔ふ畜生道
 この身を磨く。劔の山路ふ追登。とく。阿鼻地獄後の世。ひたふ。とく。
 さふふくも。彼童子を不思。幾ると。く。あふくこと。ゆき。とく。畜生ふ。とく。
 ゐ。天眼通りく。く。如。か。海。おの。ひ。さる。爽。め。く。岩。ま。か。この山川より
 本。く。禍。福。吉。凶。を。断。る。と。只。掌。外。指。を。ふ。似。く。の。め。く。の。指。の。神。子。俯。乃
 老。女。といふ。と。め。いと。う。う。ぐ。た。く。と。さ。る。え。く。介。ま。ふ。れ。神。ろ。く。く。維。く。復

いづれハ仁義礼智云々の文字あるはくハ八房ハ伴とこの山ハ入と
せし比如是畜生云々とハの文字あるはくハ果しく伴の一句のど
ハ房も亦ハ小菩提心を發し。余ハ今又畜生四足の文字ハ失く
舊の如く入道ハ行を示させ入權者の方便測がじいと云々ハ失く
女の智をのく。何と辨へ給はんや。見る所ハ死めて推と死ハ吾侪ハ犬の
氣を受けて平る。収めとる。死ハ遂ハ非命ハ終る。畜生道ハ
苦難ハ似たり。いづれハ佛法の功力あるハ八房ハ小菩提ハ入り。来
世ハ仁義ハ行の入道ハす。いづれハ死ハ示させ入の死ハさあ
ハ八房を。いづれハ殺さハ畜生の苦を抜く。いづれハとる。いづれハ
いづれハそれハ不仁なり。渠ハその主乃ハ大敵を亡したる。いづれハ
是ハ忠ハ忠なり。又去歲より。いづれハこの山ハ吾侪ハ飢渴と凌せたり。

いづれハ又養ひの恩あり。いづれハ未世ハ人ト生じ。富貴の家の子と
と。その忠ハ恩あるハ今世ハ死を促す。小忍んや。これハ
いづれハありの隨ハ告て生死を渠ハ任せん。いづれハとて殊数を
足突立ある。いづれハ眺めたる犬ハうち向ひ。いづれハ八房ハいづれハ
雲け。いづれハ幸ある。いづれハ二あり。又あハは。いづれハあり。則
汝なり。いづれハ國主の息女なり。いづれハ義を重し。いづれハ畜生ハ
伴。いづれハこの身乃ハ不幸なり。いづれハ穢し。いづれハけ。いづれハ
遊。いづれハ自得の門ハ三室の引接を希ひ。いづれハ遂ハ念願成就。いづれハ
往生の素懷を遂る。いづれハこの月の幸。いづれハ又只ハ畜生なり。いづれハ
國ハ大功あり。いづれハ。然て國主の息女を獲。いづれハ入畜の道異。いづれハその
欲を遂。いづれハ。耳ハ妙法の多。いづれハ聴。いづれハ遂ハ菩提の心ハ發せり。

霧を披	惱の雲	功徳煩	妙經乃
-----	-----	-----	-----

金はりなき



神變大菩薩

障も故に成佛ありて凡のふ余は八歳龍女のいふに。かきも無上
 菩提を授けり。便見女人のく。成仏の最初なり。かきも伏姫末期小及
 ひく。身の又犬のふ。授け品を流る。今瓜限王と云ふ。音声もく
 澄澄と。又委ま。蓮の糸を引く。又出水のま。似たり。峯の
 松風のこ。谷の幽響。由こ。石を集く。聴衆とせ。む。も
 か。あ。けん。い。愛。死道心あり。さ。経。既。果。ありて
 三千衆生發菩提心而得受記智積菩薩及舍利弗一切衆生默
 然信受と續。又。八房ハ。身を起。伏姫を見。久。水
 際を指。前。岸。鳥銃の筒音。響。忽。地。伏姫
 二。八房ハ。打。煙の中。破。し。あ。伏姫
 右の乳の下。破。苦と。一声。叫。び。あ。巻。を。含。る。

横。横。び。ひ。ぬ。時。去。歳。川。あ。る。雷。ふ。
 絶。時。間。今。鳥銃の音。も。拭。か。如。暗。年。な。や
 一。個。の。揚。人。柿。の。脚。半。あ。る。甲。掛。く。延。藏。乃
 櫛。中。の。緒。を。結。ひ。放。て。頂。掛。け。右。小。鳥銃。引。提。て。前。面。の。岸。小。立。あ。る
 流。水。と。信。と。て。既。は。流。瀬。を。知。り。と。人。銃。を。岸。より。走。る。
 今。鳥銃。角。より。掛。て。さ。指。て。さ。あ。この。川。が。急。な。れ。ど。も
 多。ふ。似。を。流。く。水。の。高。腹。を。浸。ぎ。不。被。壯。俊。の。あ。も。て。勇。て。勢。ひ
 猛。虎。の。子。を。負。ふ。と。又。驛。衆。の。牝。を。追。ふ。と。あ。る。足。を。踏。進。め。る。この
 幅。十。丈。あ。る。流。水。を。切。と。瞬。間。は。あ。る。この。岸。小。立。あ。る。且。銃。を
 揮。揚。く。打。倒。し。八。房。を。打。撃。と。五。六。十。骨。碎。け。皮。破。と。復。甦。べ。う。と
 あ。る。不。死。光。と。笑。く。鳥銃。投。捨。い。て。姫。人。を。と。石。室。の。中。に。進。み

義実朝臣ハ弓箭を捨て。珠数を刀の鞘に挿し、且送書を見せしめ、一服
とぐ小嗟嘆せしめ、といふるを、又貞形も見せしめ、その中、金碓大捕
孝徳ハ慚愧その刃を置とじ、方々、額に冷死汗を流し、刃を膝ふひに
敷く。只平伏してをりける。當下義実ハ傍の石に尻を掛く。孝徳ハ
うち對ひ跪く。たる金碓大捕、汝不覺、法度を犯す。この山に入る
のころ、今伏姫と八房をうち殺せし、其仔細あり、見刃をさめ、迫る
系、詳にこれ、死し、いふぞや。と問ふ。これ、孝徳ハ意あらずとて
面をく。要時既をゆるり、拳む。この形勢は、貞形ハ、そごほ、いふとて、出
大捕、序、旋ぶ、ゆ、且刃をさめ、む。とく、おん、答、然、す、死、や、と、さ、く、い、ひ、て
孝徳ハ、うち、小頭、爪、握、刃を鞘に納め、挿副の刀、うち、共、刃を、堀内、貞
形、ハ、遁、ふ、と、些、く、引、退、死、又、貞、形、ハ、對、く、い、ふ、や、死、後、と、こ、甲斐、小、園、江、由

君のる願成拜し年毎飲びも重くの越度るく後悔の外ゆらぎやとく不
 千万句もこの期に至るに詮るに西の弟の罪を飾るふ似られた只一條と
 中上人去年安西景連は謀りて安危のおん使をゆ果さき脱れ
 走る道まがら追捕の敵兵と血戦し辛く瀧田へ立ち上るを景連が
 大軍充滿福麻のどく攻囲む最中みく少の城へ入ると竟ふ協む
 切と和殿は力を戮し一臂の忠成盡人とあつて鮎と東條へ走らせども
 その甲斐ある被刃を益々戸納平が大軍は囲むる敵は虎口を退く
 夜の無火を焼あがり番兵とく由おせざる翹るううと城中へ
 入るべうもゆるぎ一騎をまとも敵陣へ突入とく死なるとあひ決めゆ
 るが退いて思慮成めぐるゆへにこれ亦詮るに所なり五指のから
 かる弾入りの一番より西城素より兵糧乏し寔に危窮存亡の

秋より。鎌倉へ推系。管領家へ急報告援兵を乞催して西所
 の囲を殺崩さる君のおんひ上あじと多ひえ。白濱より便船
 多く彼祖は赴き来由を速急報告援兵を乞と。主君の書翰
 ありゆき不疑ま。解とのい。そなたのある日を。白濱より
 安房へえ。景連は。滅亡。一國君が。あふ。属。呼。飲。や
 ぶ。す。切。阿。容。こと。見。あ。入。り。に。然。ま。今。さ。う
 腹。切。ま。時。節。を。俟。功。を。立。帰。系。願。ひ。ま。入。ん。そ。ま。う。乃
 隱。宅。ふ。と。舊。里。ま。上。懸。る。天。羽。の。関。村。は。赴。き。祖。父。一。作。は。由
 縁。あ。る。莊。客。某。甲。が。家。は。才。を。下。せ。る。ま。と。ま。う。去。歳。と。暮。れ。今。茲。由
 かの。秋。の。色。深。く。潜。び。い。ひ。い。ひ。本。月。の。初。旬。姫。入。の。り。灰。は。あ。て。八
 房。の。犬。小。伴。は。富。山。の。奥。へ。入。る。ひ。と。と。嘘。は。あ。る。告。は。の。あ。り。と。

未曾有の奇。高。張。る。備。小。主。君。の。暇。瑾。へ。や。彼。犬。年。ありて。人。を。慰。ま
 登。り。犬。を。殺。し。姫。入。の。狐。救。ひ。と。ま。先。非。狐。贖。入。歸。系。の。よ。ま。か
 あり。と。尋。思。し。潜。び。當。國。小。立。之。准。佐。の。鳥。洗。引。提。ま
 山。は。入。る。五。六。日。姫。入。の。お。ん。所。在。を。只。顧。索。な。り。あ。る。この。岸。の。い
 校。霧。あ。り。て。一。日。由。暗。ま。と。れ。狐。は。ど。水。の。音。の。と。凄。く。廣。陝。深。遠。の
 側。か。王。蚤。崎。輝。武。が。溺。死。の。り。さ。火。炎。ま。り。く。あ。る。と。推。量
 あり。か。ろ。く。ま。り。ゆ。さ。い。川。一。條。は。隔。ら。と。奥。へ。入。る。上。か。る。後。は
 け。と。空。く。暮。ま。う。と。の。り。頻。り。焦。燥。の。果。は。疲。勞。く。水。際。の。松。ふ
 風。うち。掛。る。む。と。の。り。ん。ま。い。ぬ。溪。洞。の。を。あ。う。あ。な。あ。ふ
 経。も。む。声。の。り。幽。又。あ。え。り。ま。や。と。騒。ぐ。宵。を。結。め。水。際。は。ま。と。

耳を側く。つくと宮の女子の声。疑へば。あまの姫。入は。ま。こ。こ。
下。既。よ。その。おん。声。を。た。つ。つ。ま。ご。おん。姿。を。ま。る。ま。る。す。この。時。り。て。神。明。
佛。陀。の。冥。助。を。仰。ぐ。ふ。あ。り。ざ。り。せ。ば。ま。る。遂。さ。げ。ん。當。國。洲。崎。大。明。神。
那。古。の。観。音。大。菩。薩。孝。德。が。忠。義。空。々。と。へ。披。霧。を。お。さ。め。く。
この。川。を。輒。く。こ。こ。さ。せ。め。入。う。と。丹。織。を。抽。つ。且。く。祈。念。し。て。目。を。
ひ。げ。ば。不。思。議。なる。今。ま。で。も。黒。白。を。ま。る。ぬ。川。霧。も。裁。み。か。如。く。暗。
く。前。面。迫。は。眺。望。し。石。室。と。お。ほ。一。丸。居。る。と。み。え。さ。せ。め。め。
姫。入。る。り。お。ひ。し。り。頼。ハ。淡。し。何。で。ふ。あ。る。勇。さ。う。人。既。よ。こ。こ。さん。と。
ま。る。招。か。八。房。へ。あ。る。く。み。え。て。や。水。際。み。指。く。走。り。ま。る。這。奴。よ。せ。つ。け。
て。み。あ。る。と。ま。る。人。難。と。ま。る。く。後。み。し。を。被。ぬ。ふ。あ。る。め。と。ま。る。矢。じ。ろ。の。
指。よ。く。る。り。ぬ。食。さ。る。鳥。洗。取。る。り。粗。固。め。二。こ。ま。火。蓋。を。切。ま。る。

お。ひ。し。り。水。際。は。し。り。う。か。物。獲。つ。と。早。川。の。水。より。ま。る。ゆ。め。く。
ん。と。ま。又。姫。入。る。も。あ。ま。れる。丸。は。傷。ら。ま。る。か。る。が。枕。は。ぬ。い。あ。る。け。き。
とも。痕。ハ。残。る。り。清。き。あ。ま。と。り。や。と。ま。る。み。盡。し。も。み。彈。せ。ども。縛。絶。
あ。ま。ま。ま。も。る。身。の。為。命。と。い。ひ。る。が。毛。を。吹。く。疵。を。求。め。る。
後。悔。其。如。お。立。ざ。り。不。切。く。冥。土。の。おん。俱。せ。ん。と。既。よ。先。知。み。究。一。折。
る。ひ。ろ。る。り。う。か。君。お。甘。め。れ。な。り。ゆ。死。さ。る。と。天。罰。あ。る。人。法。度。を。犯。
あ。く。この。山。あ。の。び。へ。の。ま。る。み。姫。入。さ。る。害。ひ。し。り。八。逆。の。罪。人。
君。が。あ。み。く。刑。罰。を。希。ふ。外。ゆ。り。ど。堀。内。ゆ。能。人。と。の。索。う。け。め。人。と。背。
さ。る。あ。ま。み。め。づ。う。と。つ。い。わ。る。り。自。ら。の。孝。德。が。忠。心。残。り。あ。る。り。ゆ。め。
る。あ。み。点。鼓。の。と。主。君。の。れ。き。み。同。へ。の。義。美。嗟。嘆。大。さ。る。と。且。し。て。
さ。る。か。り。現。禍。福。得失。ハ。人。力。を。り。と。よ。し。さ。る。凡。智。を。め。く。揣。へ。う。と。ど。

やと大帥。汝是ふその罪あり。刑罪追はさうとのふとも。伏姫が死ハ
天命なり。渠の汝はなむとて。かろふとて。この川の水質とて。人
その送書を讀みせよ。と宜へうけ。めつとて。大帥がほとふ
つねの。首より尾りま。高き。續ちど。孝徳よとて。慚愧し。
伏姫の賢才義烈は。感涙を拭ひあぐ。いふ。兼忍。悔。歎。死。續。果
け。我。実。入。孝。徳。ふ。ち。對。ひ。大。帥。何。と。さ。う。め。さ。う。で。伏。姫。が。死。と
禁。入。と。さ。う。亦。潜。び。く。ま。つ。ふ。め。さ。う。此。度。五。十。子。が。病。著。ハ。只
伏。姫。を。愛。惜。の。心。氣。疲。勞。し。く。危。急。及。べ。り。渠。が。死。ひ。と。さ。う。と
さ。う。を。異。う。く。この。山。の。奥。へ。入。て。公。り。と。さ。う。と。さ。う。か。う。さ。る
あ。折。さ。う。の。さ。う。さ。う。さ。う。人。さ。如。此。の。示。現。を。め。さ。う。さ。う。と
後。者。亦。を。楚。は。留。め。只。こ。う。と。自。殺。と。こ。の。山。へ。登。る。め。さ。う。示。現。は

任。く。川。を。さ。さ。さ。と。さ。う。水。上。を。め。さ。う。この。石。室。の。背。に。到。り。
主。後。既。ふ。この。如。く。近。つ。と。さ。う。移。ふ。鳥。渡。の。筒。音。ふ。ち。敬。馬。さ。う
未。て。ん。伏。姫。も。ハ。房。も。矢。度。は。撃。と。く。什。と。さ。う。折。く。川。を
流。さ。め。の。同。と。さ。う。伏。姫。が。雙。さ。う。け。り。と。さ。う。て。れ。ハ。要。時。樹。蔭。ふ
餘。ひ。く。縛。の。か。う。公。窺。ふ。山。豈。ち。さ。う。や。病。者。ハ。月。来。日。来。さ。う。お。し
金。篋。大。捕。る。と。ん。と。渠。驢。さ。う。お。ち。さ。う。姫。を。活。さ。う。盡。さ。う。療
養。先。小。届。さ。う。自。殺。の。先。期。ハ。野。心。の。く。姫。を。殺。せ。の。め。さ。う。次。や
つ。ひ。は。け。さ。う。と。さ。う。汝。さ。う。思。惟。ハ。犬。を。殺。し。伏。姫。を。さ。う。ひ
と。さ。う。め。の。さ。う。義。実。あ。さ。う。恥。を。さ。う。最。愛。の。女。兒。を。さ。う。け。ん
お。さ。う。汝。が。さ。う。さ。ん。や。賞。罰。ハ。政。の。樞。機。さ。う。言。一。と。さ。う。お。さ。う。と。さ。う。駟。と
舌。及。む。鐵。言。と。さ。う。ハ。房。さ。う。と。伏。姫。を。許。さ。う。と。の。一。言。を。剛。敵

亡び四の郡へ義実が當ふ入はる。只八房が大切なれ。これ前諾を
 変つて由ある。姫も亦これに固辞つて。そこより犬小伴と蹟を深山に
 住むといふも。幸ひと穢さるる。一念統經の功力はよからず。八房
 入ふ菩提は入りぬ。渠が蟠欲るを見と。伏姫とて大憐れ。憐れむ
 身くも。あちどてその氣に威に。有身とていよく奇なり。
 今その筆の迹をいふ。この禍の胎とて。因果の道理を知覚せし。
 こと當國は義兵と揚々。山下定色を討つ。と見。その妻王梓と生拘つ。
 陳謝理りある。ふ似る。とて赦しぬ。させんと。いひつる。大補が父八郎孝吉。
 かく練く。臥臥刻なり。あはれ。よ。とてその冤魂。が主。後ふ。崇。成。あ。ま。と。
 軟と。め。て。か。つ。れ。と。と。金。硯。孝。吉。が。自。殺。の。と。と。朦。朧。と。と。
 女の姿。が。眼。は。遮。り。あ。れ。ひ。て。か。の。玉。持。が。う。と。と。へ。あ。ふ。喋。り。つ。と。八。

房の犬と生るるを伏姫をぬく深山邊は隠る親小お父のせ。
 伏姫へ入るひる八郎が子は後世に。加以大捕ハ罪あり。
 亡命し忠義ふつて罪人獲ると。皆是因果の係ると。縁故と推され。
 印より義実が恩より起ると。物がいんせくハ房は伏姫を好せし救を。
 よれ王持を助んといひ一口の過云ふ露ハ未竟はこの溪洞ハ落あて。
 生るる生死の海を渡る悲しけと。ささるとく歎くハ経をきこ。
 るる神靈正あま邪あり。神の怒る人罰といひ鬼の怒る人宗と。
 彼玉持ハ悪霊あり。伏姫ハ死ハ宗あり。大捕又ハ脱と不憶罪を。
 宜小故あるるのちハ憾るみせと。身と體ていと叮嚀ハ諭し。
 智は感と孝徳ハあむも小膝を進め御殿より父が自殺も。
 命ハ曉る小足れ里あつとと。猶疑ハありハ房まで小書。

提み入る。悪霊崇めたる。君ハ權者の示現。ふする。姫うへん。
 訪せ。六維定業。まゝ。まゝ。神仏のち。ふり。け。一。日。ふ。
 あり。姫うへん。在。を。べ。た。山。その。甲。斐。る。る。へ。う。る。故。ふ。う。
 と。同。な。れ。ば。貞。節。も。小。膝。拍。く。側。も。大。陣。微。妙。や。う。う。う。君。の。と。ふ。
 あり。一。日。も。晴。ぬ。川。霧。の。忽。地。暗。ま。し。和。殿。が。う。ま。も。神。佛。の。冥。
 助。あ。る。似。く。その。実。は。ま。の。非。あり。こ。と。う。の。う。の。某。も。と。病。め。く。ゆ。と。
 真。実。と。も。て。ア。ス。も。そ。長。実。訓。は。う。ち。点。び。これ。も。亦。神。る。後。不。定。う。小。
 る。以。辨。証。と。も。禍。福。ハ。糾。る。纏。の。心。人。の。命。ハ。天。又。係。ま。り。これ。の。山。は。
 到。り。伏。姫。ひ。る。く。る。う。人。ハ。渠。只。犬。の。妻。と。い。ふ。人。則。姫。が。節。操。
 徳。義。と。ハ。房。が。菩。提。ハ。入。り。八。親。の。世。の。も。あ。う。せ。ん。と。て。控。者。の。導。き。
 あり。然。あ。う。ん。必。玉。晴。の。息。あ。う。ち。あ。う。ち。と。も。の。甲。斐。あ。う。ち。と。い。ふ。

へ。又。川。霧。の。晴。間。あ。く。伏。姫。も。八。房。の。大。陣。ハ。響。き。け。共。ハ。
 この。川。の。水。屑。と。う。ま。な。人。維。迷。書。あ。う。と。い。ふ。と。も。あ。う。さ。の。め。ハ。
 情。死。と。い。ふ。状。さ。て。迷。恨。の。う。う。ま。や。今。さ。う。い。ふ。べ。る。う。う。後。
 と。大。陣。が。父。八。郎。ハ。功。あ。う。う。う。賞。を。受。む。自。殺。世。事。不。成。入。
 い。く。その。子。を。と。り。ま。う。東。條。の。城。主。は。せ。ん。伏。姫。を。り。て。妻。せ。ん。と。
 る。折。う。大。陣。ハ。使。て。遂。は。あ。う。む。伏。姫。ハ。八。房。は。使。て。海。山。ふ。
 へ。ぬ。あ。う。至。ア。う。予。が。宿。念。画。餅。と。う。と。て。い。ふ。ま。う。と。病。ふ。
 愧。る。と。う。う。と。この。昏。縁。ハ。明。地。と。り。結。縁。は。あ。う。後。と。も。親。が。公。に。
 許。せ。う。伏。姫。は。示。し。神。童。が。言。ふ。ふ。も。親。と。夫。又。あ。う。人。と。い。ひ。
 久。夫。ハ。女。を。の。う。う。へ。か。る。有。小。姫。と。犬。と。大。陣。ハ。響。き。け。共。ハ。
 則。權。者。大。方。便。の。妙。所。と。い。ふ。人。の。い。と。か。に。因。縁。か。の。や。う。う。へ。

誰をろ咎誰をろ恨ん弦強けりあかす伏弛む物極れはかるるを休
 今よりしては家より霊の障礙をあらへうとて子孫やうとて繁昌
 せん欲さるるやと諭し多へ貞節も孝徳も疑念へ春の氷の
 ごとく解く落涙もさうけり且しく孝徳へ襟うれ合せ形骸改然
 冥加は餘る君の高恩は宵月中に秘せむひ。婚縁のうらるとん
 うけあつらんも物休る。固しとあつねとつと。さうありて姫人を
 救ひとんとせしとめやと後をえ入のりへうらん只速は某が頭と
 刻させりう。と又氷るもあつてやけり。義実とては成れぬとて
 勿論のりそ。さうとつと。むねつとつと。さう伏姫が疾へ
 疾る。り。魁生さるるあかす女を殺さるも早うとてや。これ熱この
 珠数をえりふ如き畜生云云の一句はさうふとめりふかへうとて

仁義八行をふしとめり。靈驗ハ失へうとて伏姫が倒るるとんこの
 珠数その刃を離さるる残残るるとも絶えん渠ハ舞え時より
 この珠数をうく安危を知り。後命数彈るとも。祈るハ利益ある
 とあかんや。縛協さるる罪もみ。かてや已人と頼小掛る珠数とて
 あけく額ふち。當止く念く伏姫の襟ふつと。掛るハ貞節存
 徳左右より。むるしき骸を抱起。後行者の名号と唱く。只顧祈
 念さるる伏姫忽地目を睜きく一息吻とつたるハ貞節若徳教
 喜小松む。姫人いさうつとせあかす欲入るていさ大唄くいさ。あ
 父君よりうとせめひぬ。あ心持のりふいさ。とさうとて左をた
 へうとて。取さるるさうさ。放ち諸袖額ふち。當て只潜然とさう
 現理りと義実の間近くさう袖引揺。伏姫さのそ愧めり。さうとて

平内貞初

重良



金輪大いなり



伏姫

重良

腹を裂きて
伏姫八天子を
走らす

平内貞使

虚空小舟と見えぬ。珠数ハ忽地弗と御離れり。その一百も
連ねしや。小地上へ曳と落さるる空は遠まるハの珠も繁然と
あゝ光明をなすつ。飛遠り入素とく。赫奕たる光景ハ流る星は
異るるま。主後ハ今さう小姫の自殺ハ禁めあへど。これあふぐ
蒼天をうら。仰ぐ目も見白小。あま下ぐ。とつる程小楓と音日
あは山おろの風のちゆくハの灵光ハ方ハ散失く。跡ハ東の山乃
端ハ夕月のそぞろ昇る。當是数年の後ハ大士出現して。遂ハ里見社
家ハ集合。萌牙とあふ印くくるる。かくても姫ハ深疾ハ屈せぬ。
あまる灵光を目送る。歎くや。腹ハ物あふくまらるるまけり。
神の結び。腹帯も疑ひと稍解く。心ハ心ハかろ雲もあふ。浮世の
月ハ足踏く。いそぐハ西の天ハて。道見ハ人弥陀仏と唱もあふむ。

身を鞭も鮮血ハ金も力を抜捨をす。礫と姉ハあふ。さう言ふと女
子もハ似ける。兄も。小進老死。最期ハ特ハあふるるま。

第十四回

轡を脱く。使女溪洞を渉
錫鼓鳴りて、大記總と索

かゝるふゆ。自負ハ伏姫の自殺を禁めあふる。も。押頭の花を
散せり。遠感。さうさうりける。中ハ孝徳ハ男子も。姫君乃
末期の一句ハ激さる。身を措とる。なると。亡骸のや。り。あふち
る血刀を。取て。腹を切。んと。そのと。死。実。声。を
あふ。主。大捕狼狽。する。致。その。身。小大罪。あふ。から。君命。と。俟。む。
あふ。自害。せんと。奇。怪。る。伏姫。一旦。甦。生。を。さ。ハ罪。一。等。を。宥。む。と。さ。
この山ハ。あふ。頭。を。刎。人と。捉。の。法。度。を。枉。て。あ。の。が。あ。く。腹。切。

と瓜聽んや觀念せよと進まよと刃を引提まよハ願ふとて爲と孝徳ハ
居る所の合掌ノ項を延を紹とるく上小見く刃の稻妻丁と打さる
大刀風よあひるるく孝徳が髻非と截捨るハ見たと見之る罪人由
練う後る負れも驚き必仁君の恩義よいと畏る義実ハ氷なりを
刃を女を韃ふ納く流る涙をぬき拂ひえよや爲人か多つる罪人を
刑罰せり。法度ハ君の制する所君又て瓜破るといふ古人の金言宣る
ふ。ここの民とめろ共ふふこの山ふ登るる大捕小口るる所既に
代る髻ハ渠が亡父へ寸志あり渠が擗き時よりあふ名を大捕と喚
做せハ大國輔佐の臣ととその久後を祝せふが官職ゆややく進て
治部大捕と大捕と。その國訓ハ異なるは文字ハかたぬ主後同名なる
故もや主のふはあふた崇祿才不受多人可憐に壯俊がふふ埋木と

ふんる。かきくも不便ハ親ハ郎ハ大功あり大捕も忠るれよあふと。その
親といひその子とのひ勲功あふとも賞を獲む。その死ハ臨そその罪ハ
陷るふ及びて主尚救ふふりるる。か子小ちと哀傷の涙ハあふ
禁めうじ。や大捕よ孝徳よかきくも知るハ親の爲難なるに
命成なり身を愛し佛ふつて苦行く高僧知識の名を揚よあふ
うとやと叮嚀は綸いぬハ孝徳ハ辱るふふたふり落る。涙は嘆び地は伏て
いふ。あふつて声を咽む理するふ負れハ鼻うちうて進み出今ふふぬ
君の仁心姫との心寂期ふの啣うふききとる。家臣のふ瓜かふとふ
付えさせるふ。大捕和敏が才ふとてハ一郡の守護万貫の禄ふゆり
満足する人といふとくかやうく頭を擡某寔ハ不肖ふとも如是吉生
がと菩提ふふ。今と日本廻國く灵山灵社を巡礼ハ伏姫君の後

世に品ひき君の父子の武運を祈る姫への落命も又某の祈願も
 八房の犬のあつた大といふ字と二つ小釐さ大の由及ぬ大神の大の二字と
 ころあつた大とは名は人となし上りて実朝臣適いふとて件の大を
 全身は黒白八の斑もゆゑ八房と名づけし今さう思へ八房の二字ハ則
 一戸八方に至るの義なり如神伏姫が自殺の今果小痰口より一道の白氣
 へり仁義八行の文字顯しける百八の珠因きゆり又字を八珠ハ地は
 墮とこの餘の八も光明をもち八方へ散れり遂に跡をなくするなり
 其所以ありあつたを後ふ至るなり思ひあはせしるなりやあつた菩提乃
 首途の饑別み只この珠数はまたそのわけ努極みせ入道と論て軀て
 賜され六孝徳ハ小受て再三さびうち戴きこゝ有るは君の賜の今より
 諸國編歴しつゝ去るハの珠の落る所次第終りてめづるの玉と懸き

とてんふ百八の数は満ちる又當國へ立ちて見果入りの年次登ると
 音耗る旅より行は野ざしの骸へ餓る犬の腹を肥しふなりと思ひしよ
 是を寔に今生のわ別ふべしと思ひ切てとけるこの時既小日暮る
 夜ハと初更のころなり各とて光明るける月ハ半輪の雲もつゝ山ハ
 萬樹の影あり繁なる水の水の音現る松の声鳴る小鹿ハ峯
 上小鳴る白露の霜とるる悲しむ猿ハ幽谷小叫く孤客の夜衾を寒しむ
 早も来て坊も寂しき深山路ふつとて只ひとりかくまぐ行ひとほしん
 伏姫のうらみの主後頻る小感嘆せり當下堀内負けハ孝徳ホと幾
 いふなり姫への自殺よりく時次第させ多し一日も暮山ハ峻しき小川下
 向ハかゝるはさびたき夜もあつた明させ多しあつた亡骸をいふせん
 毒蛇猛獸の思はしといふへく進退究め難義之和殿ハな平一と

多しふと同じく。雲時流吟。いづる所理。まゝとて。曉させり。遠慮
 多しふ似たり。所詮和敏と某と。姫の亡骸を昇りて。君へ。いづら
 蕉火を把せり。下山をいそがせり。人軟麓。あゝ俱の人々を留めり。
 ぬとけ多し。いづれ迎ふ。まじ。姫そのの共耳。怖しく。この溪洞を。はさ。こ。成
 前面の岸より。あま。さ。ま。遭。な。づ。う。え。あ。じ。この。幾。へ。と。う。ち。相。憐。ふ
 義実。と。は。狐。使。も。伏。姫。と。う。只。印。と。り。去。歳。と。う。ふ。在。と。け。の。狐
 弓。箭。と。う。力。の。主。後。二。人。毒。蛇。猛。獸。を。お。と。る。み。ふ。一。夜。亡。骸。と。成。と。か。る
 つ。と。遠。く。麓。は。な。と。ん。や。此。を。思。ひ。彼。狐。あ。ふ。小。男。見。ふ。と。ん。ま。り。伏
 姫。が。心。操。親。と。う。さ。の。め。を。じ。五。十。子。は。泣。き。と。う。と。う。公。あ。く。も。と。る。ぐ。と。
 び。が。多。姫。を。給。し。今。と。う。慚。愧。は。堪。え。ん。と。の。あ。は。今。そ。の。死。ふ。及。び。て。
 二。滴。の。涙。と。ん。せ。と。魂。魄。い。ま。ご。と。狐。去。う。ま。は。汝。連。が。幾。輪。女。と。う。

とく伏姫小笑まゝの枝尻をささく火と焼つけよ。こゝれ中割簞を叩くべし。
いそぐとふと宜へる貞孝徳感激しく。且伏姫の亡骸を洞の中へ入るまゝ
らせ。主後石山の樹下小團坐して老づみ天の明る候もあつたり。浩如又前面の
岸小群の焦火因をく人絡繰はゆめえたり。貞孝遙よこ目尻入てこゝれハ一そ
人こがむん迎ふまゝとこゝれでやこの形尻流せんとしむも乾らむ衝と立て軀く
水際よまり出。其か小見ゆ焦火へむん迎の人こゝれに。殿へさうこみ存在ぞ
吾們既小この川尻流せり。風吹とさうさう人あく流まゝ緩く瀬へ浅く。さく
海一丈と声を限り小ゆびうけらと折ち追風うらとさく。その声定ふ焦え
けん焦火をもちこちと閃く坂をさぐり。岸小をり立とおやくて先よまむ
め。後小繞くめの馬を牽入と声をあじく。人群流一あつこゝれこの岸小を尻
見とて。あひるされ女轎を釣基とふお小拈念。健たう男七八人赤裸あく

へる。早より。その餘ハ麓へ送さし。後者又瀧田より来る由あり。貞仍
 ちや。兄。皆。あ。ま。い。ふ。と。同。く。招。ふ。轎。子。を。早。ち。召。衆。皆。水。際。ふ。つ。み。ぬ。
 い。ふ。ち。う。日。の。没。う。と。せ。比。ま。ど。屋。方。の。帰。り。を。待。つ。後。吾。們。既。ま。う。い。ふ。世。
 途。ま。ぐ。迎。な。え。と。く。ま。出。け。折。奥。さ。り。より。火。急。の。お。ん。使。事。れ。り。よ。と。も。あ。り。
 共。お。あ。を。い。さ。し。火。と。も。い。程。と。う。く。日。を。消。し。あ。る。の。岸。や。ぐ。衆。に。お。喚。
 み。と。う。く。吾。們。の。満。ち。づ。も。あ。り。と。い。ふ。兩。具。続。松。な。い。衆。衆。て。來。る。釣。
 臺。は。彼。お。ん。使。の。轎。子。を。拾。若。幸。く。も。満。ち。て。い。と。い。ふ。は。貞。仍。ち。ち。点。改。さ。ふ。
 微妙。由。と。う。く。ふ。り。お。ん。使。と。く。こ。と。へ。と。い。ふ。と。う。せ。五。六。人。ま。わ。り。ま。で。も。こ。や。
 細。引。の。林。書。成。解。ま。り。轎。子。の。し。を。引。用。け。り。と。う。い。ふ。お。ん。使。へ。專。女。ま。で。年。
 紀。四。十。未。ま。り。お。ん。柏。田。と。も。い。ふ。う。い。ぬ。比。伏。姫。の。安。否。成。ま。で。死。と。い。ふ。密。
 使。を。う。け。り。と。う。く。前。面。の。岸。ま。で。ま。つ。る。の。と。こ。の。日。火。急。の。お。ん。使。ま。で。ふ。

道。見。縣。夫。を。お。ん。せ。と。う。く。ふ。り。と。う。く。入。轎。の。と。う。く。ま。い。二。尺。あ。ま。り。な。る。白。布。と。
 結。ぶ。さ。げ。と。う。く。身。の。下。帶。の。上。より。鳩。尾。の。や。と。う。く。ま。て。白。き。練。を。い。く。へ。と。と。
 多。く。巻。締。て。お。ん。練。の。絆。卷。を。ま。で。と。俗。に。早。打。と。い。ふ。の。め。え。と。い。ふ。と。精。悍。
 ち。と。う。く。め。の。う。長。途。成。推。し。つ。ま。お。ん。目。眩。き。と。う。く。左。右。ま。ぐ。へ。ま。り。
 け。り。衆。皆。扶。け。り。と。う。く。招。ふ。貞。仍。は。且。長。実。の。や。と。う。く。ふ。り。て。如。此。と。い。ふ。と。や。め。
 あ。ま。い。は。柏。田。も。後。に。跟。く。と。う。く。ま。ま。と。ま。ま。実。の。こ。の。使。の。と。い。ふ。と。は。と。う。く。ま。の。由。へ。
 同。多。ハ。柏。田。ハ。憶。さ。る。氣。さ。る。と。う。く。と。う。く。頭。成。拳。う。が。君。さ。る。と。う。く。の。時。に。
 御。館。を。出。さ。せ。り。の。後。奥。さ。る。の。お。ん。病。著。い。と。う。く。ま。ま。と。う。く。重。ら。せ。り。と。う。く。敷。ハ。
 かく。せ。り。と。う。く。や。と。同。く。時。に。同。甘。め。い。式。ハ。假。寐。の。お。ん。言。め。と。姫。之。其。
 如。の。お。ん。ま。ま。と。う。く。如。く。お。ん。ひ。う。け。と。う。く。ち。泣。き。お。ん。量。王。と。う。く。ま。ま。と。う。く。痛。く。れ。り。限。り。
 ぬ。と。う。く。温。水。ハ。と。う。く。心。曹。司。成。を。と。う。く。衆。に。角。扇。を。持。さ。せ。り。と。う。く。父。人。と。妙。

君とみづろ訪せり人々多く実の富山小越たひぬけ一日おせり
城下ゆきと来まふととらふへち驚れりひつ富山へ名こそ
所とて殿の被れへ起るなり異なりかき還りぬと喚にされし
ふふ曹司ものうせえと仰まふと柏田へ被山の案内知るなり
まふとて屋方おせりひくよりまふ一時へ過へりまふとて追著
るんふとてひくふくやせとまふとて小物とてあを遠て御館と
ふと人疲るなり里くく肩を継せり急がせ辛くまふなりと
まふと折う外面より後者小越まふと前面の岸小隠と火の光えり
今や水際をまふとまふとあはれ正る轎子まふとまふとねとまふ
罵散動声罵こり負の孝徳まふと走まふと眺め再度の急な
りまふとまふと扶掖とてまふと下知まふとけりまふとまふと

釣臺を打ちけり寛竟の奴隸十人あり流水氷切と石を踏除ありこの岸
越えりくく釣臺小轎子を括えりその後者ホの共お馳し
あはれまふと且轎子を解かりとてまふと戸を開けり裡より一個の女房
年へまふと足とてその名を援織と喚りぬと蟬娟と額髪と練の弁
巻まふと措けり打扮へ柏田まふとて父なりかく援織へ轎子とまふと
かき氣絶と忽地と倒れり負の孝徳驚き顔小石塙を伏さる
せふ飲せまふと小動るまふとまふと負のホ小挨拶と固
かきえ使小擇まふとまふと長途の疲勞を物とせまふと負の孝
徳小越りまふと前よりまふと実を声かけり度なり
再度の使へりひくひく五子へりまふと同せり罪とて落
涙を拭ひまふと奥なる今朝己のころとまふと伏せり前より



使女
如乃
松乃
水急
を歩
そ

堀内自乃

るあらこのやせといひける。何れと云ふ。出くゆね。かき不俟せむ。たね
トといふ。さきく。使者ハ瀧田へ立入。傳の趣をヤセ。ふ。氏実。嘆賞大。こ
る。さき。渠既。誓ひ。六十餘。國。偏。歴。る。死。去。る。八。の。珠。を。舊。の。珍。教。は
勢。だ。苗。か。生涯。安。房。へ。か。つ。と。豫。て。い。ひ。つ。と。あ。れ。再。會。定。は。揣。じ。迷。憾。と
なる。と。い。ひ。つ。と。あ。れ。再。て。彼。方。を。索。致。め。つ。と。さ。の。と。さ。は。小。絶。や
あり。けん。大。坊。が。恙。多。く。ゆ。ま。さ。る。と。あ。れ。渠。が。よ。ま。さ。ふ。る。は。と。明。年
伏。姫。の。二。周。忌。の。比。で。小。富。山。は。一。宇。の。觀。音。堂。を。建。立。し。伏。姫。の。徳。い。ふ。八
房。が。る。さ。え。紀。し。と。姫。の。達。書。り。共。は。厨。子。の。うち。へ。納。め。ら。ふ。今。う。は。富。山。ふ
觀。音。堂。あり。か。て。野。の。年。々。歴。と。も。大。坊。が。音。信。は。畢。竟。彼。法。師。か
久。後。い。ふ。さ。後。の。巻。より。解。る。え。
作者云。六の書は筆輯第一巻より今この巻に至る。則一部小説乃

用場ハ士出現の幾端あり。是より次の巻より年月相次ぎ。いと後の
う。ふ。な。づ。その。間。は。物。語。る。一。譬。ば。彼。水。滸。傳。は。龍。虎。山。で。洪。信。が
石。碣。を。見。る。の。段。より。林。冲。が。出。現。せ。る。その。間。數。十。年。物。語。る。は。正。に
又。い。ふ。この。巻。の。出。像。の。中。金。瓶。大。輔。孝。德。が。川。原。涉。を。圖。の。ど。ろ。文。外。の。画
画。中。の。丈。人。この。出。像。は。よ。う。と。忽。然。と。う。雲。霧。の。暗。さ。か。る。狐。知。り。に
る。又。使。女。の。急。然。は。柏。田。梭。織。を。子。と。し。ふ。その。在。郊。外。先。は。て。その。ある。所。を
後。は。せ。り。首。尾。錯。乱。し。何。と。い。ふ。た。さ。ふ。あ。ま。と。其。人。の。小。傳。未。歴。後。は。僅。に。その
人。の。口。中。より。幾。出。と。を。事。を。先。は。し。く。後。後。を。画。も。亦。是。の。後。の。あり。る
あ。る。あ。る。と。画。通。ハ。只。その。画。と。画。と。て。その。意。を。意。に。ゆ。さ。る。と。あり。る。は
の。と。作。意。と。岩。齋。の。死。は。あ。ま。と。この。巻。中。に。ある。と。あり。る。看。官。は。と。察。是。に。

